

近代における海地獄と湯治

19 世紀の後半には、鉄輪は代表的な温泉地となっていました。1885 年の豊後国速見郡村誌では、鉄輪はわずか 563 人の小さな村と記録されています。そして住民の約 4 分の 1 が副業として旅行者に部屋を貸し出し、村にある 139 軒の建物のうち 34 軒が宿泊施設だったことが記録されており、そして年間約 3,000 人の観光客が、鉄輪の温泉を湯治目的で利用していたようです。これらの湯治客の多くは、農業のオフシーズンに、休息と回復のためにやって来た農民であったとされています。

20 世紀初頭、千壽吉彦という事業家が別荘に温泉を引く目的で海地獄の土地を購入しました。そして、その土地を管理していた宇都宮則綱は、手ごろな料金で観光客に海地獄を見せるというアイデアを思いついたのです。このようにして海地獄の創設者たちは、かつては危険な場所、あるいは無用の土地とされていた熱湯の沸き立つ温泉を、お金を稼げる観光名所へと変えたのです。

この開発は他の鉄輪周辺の同様の事業とともに、温泉地としての村の成長を促す重要な要因であったと考えられています。1919 年の記録によると、当時の入浴者の数は年間約 17 万人に達しました。